

Thème 2

中世研究とフランス語教育 —フランス語教員のための歴史文法—

有田 豊

片山 幹生 ヴェスイエール・ジョルジュ
[佐藤 吾郎]

ARITA Yutaka
立命館大学

KATAYAMA Mikio
早稲田大学

VEYSSIERE Georges
パリ第4大学

arita410@fc.ritsumeai.ac.jp

mikiokat@gmail.com

gveysiere@gmail.com

1. はじめに

外国語を学ぶ際に出てくる言語についての素朴な疑問は、学習者の言葉に対する純粋な知的
好奇心から生まれるものである。しかし、こうした疑問の一つ一つにこだわりすぎると学習効
率が悪いと、徐々に言葉に対して「問い」を持つ習慣をなくしてしまい、いつしか「そう言
うものだから」と問いを飲み込んでしまうようになる。学習者のこうした素朴な疑問は、言語
にとって本質的な点を突いたものであることが多く、語学教員としてもそれに誠実に答えるの
は困難を伴う。ただ、語学教員としては、可能な限りその問いに向き合い、学習者の知的
好奇心を刺激し、フランス語学習の動機付けとしていきたいところである。

本稿の執筆者の3名は中世研究を専門としており、研究上の必要性からラテン語、古フラン
ス語、古オック語、中フランス語など、様々な言語を学んできた。フランス語学習者が抱く素
朴な問いの中には、こうした古い言語の文法、いわゆる「歴史文法」によって説明可能なもの
が少なくない。「フランス語」を一枚岩の規範的／固定的な言語として捉えるのではなく、歴史
的文脈の中で捉えることで、現代のフランス語に見られる様々な規則性と例外に通時的な変
化の過程を見いだすことができるだろう。歴史文法の知識は、実用的な観点からフランス語を
学んでいるだけでは得ることができない、言葉の深遠さに触れることを可能にするのである。
教員は、学習者が持つ「問い」の全てに答えることはできない。しかし、一つ一つの問いを誠
実に受け止め、回答を得るための道筋を示すと言う知的態度を教員が示すことは、大学での語
学教育において重要なことではないだろうか。フランス語史的発想や歴史文法の知識は、学習
者の言語に対する素朴な問いへの解答への鍵となるのである。

以下では、フランス語初学者が抱く疑問の代表的な例と思われる「名詞の性」、「不規則動詞
の活用」、「フランス語の数詞」を取り上げ、歴史文法的観点からの学習者への説明の例を提示
していく。

2. なぜフランス語の名詞は、男性と女性に分かれているのか？

1 つめの問いは、名詞の性に関するものである。フランス語はインド＝ヨーロッパ語族の 1
つで、この語族に含まれるほとんどの言語には文法的な名詞の性の区別が存在する。インド＝

ヨーロッパ祖語は、男性、女性、中性の三性だったと考えられているが、それは「有生」animésと「無生」inanimésの2つのカテゴリーから分化したと推定されている¹。有生名詞については、文法的な性は原則として自然の性に従う(ex. coq / poule, chien / chienne)。しかし無生名詞については、論理的な推論から男性と女性を判別することが難しい(ex. mur (m.) / muraille (f.))。また名詞の性は言語によって異なっている。たとえば、「サラダ」はフランス語で女性名詞 la saladeだが、ドイツ語では男性名詞 der Salat となっており、無生の名詞の性と名詞が指す概念との間に関係性は見られないのである。

フランス語における名詞の性の多くは、その直接の先祖であるラテン語の性に由来する。ラテン語の性は、男性、女性、中性の3つである。無生名詞の多くは中性に登録されているが、雌雄の別によって象徴的に捉えることが可能なものは、男性と女性に分類されるものもあった。

中性名詞のカテゴリーは大半のロマンス語で消滅したが、男性／女性の対立は維持され、ラテン語の中性名詞は男性名詞・女性名詞に振り分けられた。この振り分けには、主に男性が用いるもの、女性が用いるもの、男らしいイメージを持つもの、女らしいイメージを持つものなどといった類推によるものもあったが、一番多いのは接尾辞の形や語末音による振り分けである。ラテン語の形容詞の大半では、変格語尾の -us は男性形、-a は女性形を示すが、名詞ではこの変格語尾は必ずしも性の指標とはならなかった。たとえば、dominus (主人) は男性だが、populus (ポプラの木) は女性名詞であり、rosa (薔薇) は女性名詞だが、agricola (耕作人) は男性名詞である。

ロマンス語では、ラテン語で -us の語尾を持っていた名詞を男性に、-a の語尾を持っていたものを女性に登録する傾向が強い。たとえば、「手」を意味する manus を除き (仏: main)、-us で終わる名詞は全て男性名詞に登録された。樹木名の多くはラテン語では -us の語尾をもつ第4変格の女性名詞だったが、ロマンス語では語形から全て男性名詞に変わった(ex. 「松」 pinus (f.) → pin (m.)、 「もみ」 sapinus (f.) → sapin (m.))。

中性名詞は変格語尾の -m が脱落することによって、文法性の振り分けの混乱はますます大きくなった。ラテン語の中性名詞の単数形の多くは男性名詞に組み入れられた(ex. 「空」 caelum (n.) → ciel (m.)、 「ワイン」 vinum (n.) → vin (m.))。中性名詞の複数形の語尾 -a は女性名詞の単数形の語尾と同じだったため、複数形で使われることが多かった中性名詞はロマンス諸語では女性単数名詞となったものが多い(「武器」 armum, arma (n. pl.) → arme (f.s.)、 「葉」 folium, folia (n. pl.) → feuille (f.s.)、 「唇」 labrum, labra (n. pl.) → lèvres (f.s.))。果実名の大半は中性名詞だったが、フランス語では女性名詞となった(「梨」 pira → poire、 「りんご」 poma → pomme)。

3. どうして être や aller の活用は、こんなにも不規則なのか？

2つめの問いは、活用に関するものである。フランス語の動詞の活用を解説する際、難儀するのが「不規則動詞」の活用だろう。基本動詞の中では être, aller などが代表的なものとして挙げられるが、なぜこれらはかくも不規則な活用体系を持っているのだろうか。不規則動詞が生まれる理由として、石野 (2017) は「使用頻度が高い動詞ほど不規則動詞になりやすい。なぜならよく使うため、楽に発音できる形に変えられやすく、その結果規則的でなくなるが、よく使うため、多少不規則でも忘れることはないので、形が維持されるから」と述べている²。しかし、être と aller に関しては「使用頻度が高いから、不規則になった」という点のみならず「複

¹ Guy JUCQUOIS, « INDO-EUROPEEN », *Encyclopædia Universalis* [en ligne], consulté le 21 avril 2019. URL : <http://www.universalis.fr/encyclopedie/indo-europeen/>

² 石野好一 『中級フランス語文法——フランス語をもっと知るために』 駿河台出版社, 2017.

数の動詞が合成された結果、不規則になった」という点からも説明が可能である。

◆être の成り立ち

être は、フランス語の動詞の中でも極めて不規則な活用体系を持つ。なぜこのような不規則活用になったかという点、être の中に2つの古典ラテン語の動詞 *esse* (～である) と *stare* (立っている) が混在しているからである。まず、不定詞 être は、*esse* (古典ラテン語) → *ess(e)re* (俗ラテン語) → *estre* (古フランス語) → être (現代フランス語) という変化によってできたと考えられる³。*esse* に基づく形は、古典ラテン語の完了時制の語幹 *fu-* が直説法単純過去 (*fus, fut...*) や接続法半過去 (*fusse, fusses...*) に、俗ラテン語の不定詞 *essere* が直説法単純未来 (*serai, seras...*) や条件法現在 (*serais, serait...*) などに残っている。続いて *stare* に基づく形は、古フランス語の不定詞 *est(er)* が直説法半過去 (*étais, était...*)、過去分詞 (*été*)、現在分詞 (*étant*) などに残っている。

◆aller の成り立ち

être に並ぶ不規則な活用体系を持つ動詞として、aller が挙げられる。aller を活用する際には語幹に *v-*, *all-*, *ir-* といった語幹が出てくるが、*all-* はまだしも、*v-*, *ir-* が出てくるのはなぜか。それは、aller の中に3つの古典ラテン語の動詞 *ambulare* (歩き回る), *vadere* (前進する), *ire* (行く、歩く) が混在しているからである。まず、不定詞の aller は、*ambulare* (古典ラテン語) → *amlare, alare* (俗ラテン語) → *aler* (古フランス語) → aller (現代フランス語) という変化によってできたと考えられる。これに基づく形は、直説法現在 (*allons, allez*)、直説法半過去 (*allais, allait...*)、接続法現在 (*aïlle, aïlles...*)、接続法半過去 (*allasse, allasses...*)、過去分詞 (*allé*)、現在分詞 (*allant*) などの語幹に広く見られる。続いて *vadere* に基づく *v-* の語幹は直説法現在 (*vais, vas, va, vont*) に見られるし、*ire* に基づく *ir-* の語幹は直説法単純未来 (*irai, iras...*) や条件法現在 (*irais, irait...*) に見られるのである。

このように être や aller の活用は、複数の動詞の、時代ごとに異なる形態が長い時を経て融合してきた結果といえよう。なお、être の活用は直説法現在の形が最も不規則だが、これは古典ラテン語 *esse* の直説法現在の活用を殆どそのまま踏襲していると考えていいだろう。「～である」を意味する動詞は、古典ラテン語の時代から既に不規則な活用体系を持っていたのである。

直説法現在の活用形態の変遷

古典ラテン語		古フランス語		現代フランス語
sum	→	sui, soi, suis	→	je suis
es	→	ies, es	→	tu es
est	→	est	→	il est / elle est
sumus	→	somes, sommes	→	nous sommes
estis	→	estes	→	vous êtes
sunt	→	sunt, sont	→	ils sont / elles sont

³ *ess(e)re* から *estre* への変化の過程において *t* が挿入される理由は、*s* と *r* が隣り合って発音しにくく、つなぎの子音を入れることで、楽に発音できるようにするため。これは「語中音添加」*épenhèse* と呼ばれる現象であり、「母音+s+子音*r*」において *s* が「有声」の場合には子音との間に *d* が、*s* が「無声」の場合には子音との間に *t* が発生する。

4. なぜフランス語の数詞はこんなにも複雑なのか？

3 つめの問いは、数詞に関するものである。フランス語の数詞は、かくも複雑な体系を持っている。歴史文法の知識を使えば全ての説明がつくというわけではないが、多少なりとも学習者の暗記の負担を軽減する論理を提供することは可能である。本稿では、とくに初級文法の指導の際に問題となる3つのポイント——1. *seize* から *dix-sept* への移り変わり、2. 接続詞 *et* の有無、3. 70 から 99 の数詞——を扱うことにする。

◆*seize* から *dix-sept* への移り変わり

基数詞の 16 に続く 17 で、いきなり数の形態が変化することに戸惑いを覚える学習者は多いだろう。なぜこのような変化が生じるのかというと、古典ラテン語から現代フランス語への変化の過程において、同じ数詞を示す複数の表現が存在したためである。

基数詞の歴史の変遷 (11~22)

数字	古典ラテン語	古フランス語	現代フランス語
11	undecim	onze	onze
12	duodecim	doze	douze
13	tredecim	treze	treize
14	quattuordecim	quatorze	quatorze
15	quindecim	quinze	quinze
16	sedecim	seze	seize
17	septemdecim (俗ラテン語 <i>decem et septem</i>)	dis et set / dis set	dix-sept
18	duodeviginti / octodecim (俗ラテン語 <i>decem et octo</i>)	dis et uit / dis uit	dix-huit
19	undeviginti / novemdecim (俗ラテン語 <i>decem et nove</i>)	dis et neuf / dis neuf	dix-neuf
20	viginti	vint	vingt
21	viginti unus	vint et un / vint un	vingt et un
22	viginti duo	vint et deus / vint deus	vingt-deux

17 を例にとると、古典ラテン語では *septemdecim* (7 と 10) という形態があったことがわかる。それが俗ラテン語になるにつれて *decem et septem* (10 と 7) へと順番が変化し、この形態が広まった結果、古フランス語では *dis et set / dis set* となり、最終的に *dix-sept* が現代フランス語として残ったのである。そもそも古典ラテン語では、十の位と一の位の組み合わせの方法が 2 通りあったことにも注目しておきたい。1 つは現代フランス語と同様、十の位の後に一の位を置く方法 (ex. 22 : *viginti duo*)。もう 1 つは、一の位の後に十の位を置き、両者の間に接続詞 *et* を入れる方法である (ex. 22 : *duo et viginti*)。さらに俗ラテン語では、2 通りの組み合わせが混ざった形 (ex. 22 : *viginti et duo*) が存在していたことも付言しておく。

◆接続詞 *et* の有無

vingt, vingt et un, vingt-deux... と続くとき、一の位が「1」の時だけ接続詞 *et* が挿入される現象がある。なぜ *et* が入るのかという問いに関しては、歴史文法の知識を用いても明確な結論が出せない状態である。この書式の歴史を紐解いてみると、17 世紀の文法家 Antoine Oudin は自著 *Grammaire française rapportée au langage du temps* (1632) の中で「あらゆる数詞に対して、*et* を書くこと」を勧めている。つまり、17 世紀当時は接続詞 *et* を入れたり、入れなかったりと

書式が混在していたのである (ex. 21 : vingt et un / vingt-un)。結局、この勧告は守られなかったわけだが、2つの数字の間に et を入れる／入れないという議論は以後 19 世紀まで続き、1846 年には当時の文法家 Louis-Nicolas Bescherelle も自身の辞書で「vingt et un / vingt-un のいずれの言い方も可能」としている。こうして 2つの書式が長く共存した結果、現在では 21、31、41、51、61、71 には接続詞 et をつけ、81、91 は quatre-vingt-un、quatre-vingt-onze と et をつけないことになっているが、その決定の過程は不明瞭である。

◆70 から 99 の数詞

60 までは単純に十の位と一の位を合算して数を表示するが、70 以降は同じルールが適用できないのが、フランス語の数詞のややこしいところである。なぜ 71 を示すのに「70+1」ではなく「60+11」と表現するのか、なぜ 80 を示すのに「4×20」と表現するのか。それは、古代ローマ人たちが使用していた 10 進法と、ケルト人たちが使用していた 20 進法が混在しているためである。

基数詞の歴史的変遷 (70、80、90)

数字	古典ラテン語	古フランス語	現代フランス語
70	septuaginta	setante, septante	soixante-dix / septante
80	octoginta	oitante, octante / quatre vinz	quatre-vingts / huitante (octante)
90	nonaginta	nonante	quatre-vingt-dix / nonante

ただ、言語学者 André Martinet は後者のガリア由来に疑問を呈しており、ケルト人たちが 20 進法を使用していたという明確な根拠はないと述べている⁴。そもそもなぜ 20 進法なのかということに関しては諸説あるが、20 は大きな数字であり、完全なものを表す「1つの単位」であったことは確かである。フランスの教育機関での点数評価が 20 点満点でなされているのも、それに関係しているのかもしれない。septante, huitante (octante), nonante などの数詞は、スイス、ルクセンブルグ、ベルギー、またベルギーの植民地であったコンゴ民主共和国、ブルンジやルワンダで使用されているが、これらの書式はフランスではあまり普及しなかった。その理由は、いまだ謎に包まれている。

⁴ André Martinet, « Soixante-dix et la suite... », *Interlinguistica, Festschrift zum Geburtstag von Mario Wandruszka*, Tübingen, Niemeyer, 1971, pp. 215-219.